

第 175 回ミニ企画展 「近江神宮造営史～建築技師大洞藤三郎の設計図面から～」解説シート

会期：2022 年 9 月 6 日（火）～ 10 月 30 日（日）

◆はじめに

当館では、2021 年度に近江神宮創建時の図面類をはじめとする近代社寺建築関係資料をご寄贈いただきました。この資料は、昭和期に活躍した建築技師の大洞藤三郎氏が保管していたものです。

大洞技師は岐阜県の出身で、早稲田工手学校（現：早稲田大学芸術学校）を卒業し、当時神社建築の分野で活躍していた小林福太郎に師事し、同氏の事務所であった小林建築設計事務所で腕を磨きました。特に昭和 13 年から 19 年（1938 ～ 44）にかけて行われた近江神宮造営においては、近江神宮奉賛会嘱託技師（のちに主任技師）の立場にあり、現場監督として活躍しています。

大洞技師は生前、『近江神宮造営誌』を著したいという構想を持っていたそうです。造営開始当時、30 代半ばという若さで、大規模な神社の工事に携わったことは、大洞技師にとって充実した体験として記憶されていたことでしょう。残念ながらその構想は実現しませんでした。本展では大洞技師の遺した資料などをもとに、近江神宮創建の時代をたどりたいと思います。

◆創建前史

近江神宮創建されたのは昭和 15 年（1940）のことでしたが、近江大津宮を開いた天智天皇を顕彰する動きは、その数十年前から存在していました。明治 28 年（1895）に当時の大津町長ら有志による「志賀宮趾碑」の建立が企図され、明治 41 年（1908）には大津市政施行 10 周年を記念して、天智天皇を奉祀する神社創立の構想が出されました。翌年には国会への請願も行われ、採択を受けています。その後も請願は続き、また大津市の有志を中心とした請願運動も、次第に全县を巻き込んだ運動へと発展していきます。

昭和 8 年（1933）には滋賀県知事が天智天皇奉祀神社の創立について内務省と交渉を行い、また滋賀県議会でも神社奉祀調査費として 1500 円の予算を可決しています。翌年には神社奉祀調査委員会が組織され、昭和 10 年（1935）には内務省神社局より考証官の宮地直一と技師の角南隆が相次いで来県し鎮座候補地の調査を実施、また角南の斡旋により小林福太郎が社殿の基本設計を担当しました。

そして昭和 12 年（1937）、近江神宮の創建が正式に決定し、来る昭和 15 年（1940）の鎮座に向けて動き出すことになります。

◆近江神宮造営工事（第一期工事）

近江神宮の造営工事は二期に分かれており、第一期工事は昭和 13 年（1938）頃から始められ、紀元二千六百年を迎える昭和 15 年までを工期とし、本殿以下渡廊、中門、登廊、内拝殿、外拝殿、内院廻廊、神饌所、社務所等の造営が計画されていました。このうち本殿から内拝殿までの建設は国費による直営で、その他の建設工事は奉賛会の分担でした。

この頃より、大洞技師は本格的に近江神宮造営に携わります。造営のために設立された近江神宮奉賛会で主事を務めた石川金蔵は次のように回想しています。

「御造営の大体プランは内務省神社局で出来たが、之が実施設計と現場監督に付ては兎玉局長を経て角南技師に相談した処、紀元二千六百年迄に第一期工事を仕上げるには中々骨である。安くて克く働く人物を選定する事が根本要件である。夫れには何としても民間の営業者を雇入るに限るとの注意を受け且其の人物としては現時社寺建築には全国一と謂はるる小林福太郎工務所が

最適と考へるとの話であつたので早速小林にわたりを付けて設計に着手し、小林の大番頭格の大洞藤三郎を引抜き竹腰隆を附けて貰って現場監督に衝らしめたのである。」（石川金蔵『近江神宮御造営秘話 其ノ一』より引用）

この時点で、大洞技師が小林の下における筆頭格の技術者として知られていたことがわかります。工事の進捗は、昭和 13 年 6 月に地鎮祭、翌年 5 月には本殿立柱式が行われ、更に工期の迫った昭和 15 年には続々と建物が出来上がっていきます。そして同年の 11 月 7 日に至り、鎮座祭を迎えることになりました。

◆近江神宮造営工事（第二期工事）

昭和 15 年に鎮座祭を迎えた後に、引き続き形で第二期工事が行われました。建設が予定されていたのは、楼門および廻廊、北神門、神楽殿、参集所、歴史館などで、第一期工事完成後の境内の空隙を埋めるものでした。当初は昭和 18 年（1943）中に工事完了の予定だったようですが、この頃になると戦局の悪化に伴ってか、物資不足のみならず徴兵や動員等による人員不足にも悩まされていたようで、施工業者による工期延長を願い出た書類が残っています。

それでも昭和 16 年（1941）に神楽殿地鎮祭、翌年末には神楽殿上棟祭および北神門地鎮祭、明けた昭和 18 年（1943）には北神門上棟祭と楼門廻廊地鎮祭が行われ、同年末には楼門の上棟祭が実施されました。またこの間には、昭和 14 年に発掘されていた崇福寺跡出土の舍利容器が近江神宮の神宝として下賜されています。

そして一部の建物を除き（予定されていた歴史館は、空襲に備えて鉄筋コンクリート造に計画変更されたものの、終戦により完成せず）、昭和 19 年（1944）11 月 5 日に、造営の完成を報告する御造営竣工奉告祭および竣工式が行われ、7 年に及ぶ造営工事の完了を迎えました。

◆近江神宮造営工事の日々

ここまでが近江神宮造営のあらましです。時局ゆえの困難に見舞われつつも、近江神宮は完成の日を迎えました。現場の指揮にあたった大洞技師はもちろんのこと、携わった技術者、勤労奉仕に参加した学生たちや、造営のための寄附をした多くの県民にとっても、意義深い出来事となったことでしょう。そうした人々のはたらきは、残された日誌や多くの現場写真などから窺うことができます。

◆おわりに

ここまで見てきたように、近江神宮の造営は平坦な道のりでなく、多数の困難を乗り越えて創建を果たしました。その陰には多くの関係者の尽力と、何より大洞技師の不断の努力があったと言えるでしょう。

戦後の神道指令による主要財源の喪失や、楼門への放火など、近江神宮の困難は続きますが、今日では大津市民をはじめとする人々の初詣や七五三など、様々な祭礼の場として、また近年では競技かるたの聖地として、多くの人に親しまれる神社となったことは皆様をご存じの通りです。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、社寺建築資料の旧ご蔵者様をはじめ、貴重な資料を出品いただきました近江神宮ほか、ご協力を賜りました関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

近江神宮創建関係略年表（1895～1945年）

年次	事項	関連事項・世相など
1895年（明治28）	大津町長西村文四郎、有志の抛金により滋賀郡滋賀村錦織御所内（現・大津市錦織）に「志賀宮趾碑」の建設を計画、11月に竣工。	1894～95年、日清戦争。
1900年（明治33）	日吉大社神宮近藤明ほか有志、公爵近衛篤磨（近衛文麿の父）を会長として大津宮創建を企図。	
1903年（明治36）	長等神社社司中村勝明・関蟬丸神社社掌三上在也ら、大津宮創建を大津市長村田虎次郎に建議。	
1905年（明治38）	4月、天孫神社社司滋賀明嘉・平野神社社司平野定協・三尾神社社司伊東忠三・日吉神社宮司伊藤紀・近藤明ら7名、大津市参事会に建議書を提出。次いで協議会を開いて大津宮崇敬会の名で趣意書を起草、滋賀県知事鈴木定直、大津市長村田虎次郎に応援を求める。	1904～05年、日露戦争。
1908年（明治41）	大津市制十周年記念として、大津市長西川太治郎により天智天皇奉祀神社創立の趣意を発表。大津市において大津宮崇敬会を組織、「大津宮天皇御事績考」を刊行。	
1909年（明治42）	3月、大津市長西川太治郎ほか32名、衆議院に「大津神宮創設請願書」を提出、同月の衆議院第25議会の請願会議で採択。 12月、大津市長西川太治郎ほか37名、衆議院に「大津宮創設請願書」を提出。翌年2月の衆議院第26議会の請願会議で採択。	
1911年（明治44）～ 1914年（大正3）	この年より1914年まで毎年帝国議会に請願、採択を受ける。	1914年、第一次世界大戦勃発。
1919年（大正8）	滋賀郡滋賀村（現・大津市）若代久太郎ほか百数十名、志賀神社創立許可願書を内務大臣宛に提出。 1月、滋賀県知事堀田義次郎、天智天皇奉祀神社創立に関して内務省神社局長宛に内儀書を提出。	1918年、第一次世界大戦終結。 1920年、明治神宮創建。
1932年（昭和7）	3月、滋賀県知事新庄祐次郎より天智天皇奉祀神宮創立計画書を内務省神社局長に提出。大津市議会議長辻井喜之助より滋賀県知事及び内務大臣に上記に関する意見書を提出。6月の衆議院第62議会において請願を採択。	5月、五・一五事件発生。
1933年（昭和8）	滋賀県知事伊藤武彦、天智天皇奉祀神社創立について内務省と交渉開始。また滋賀県議会において神社奉祀調査費1500円を議決。衆議院第64議会において請願を採択。同議会において滋賀県選出議員の清水銀蔵・服部岩吉らが志賀神宮創建の建議案を提出、委員会により可決。	1月、ヒトラーが首相に就任しナチスが政権を獲得。 3月、日本が国際連盟から脱退を表明。
1934年（昭和9）	5月、衆議院第65会議において天智天皇奉祀神社創立を請願し、これを採択。同議会において建議案を可決。滋賀県会議長より内務大臣、県知事に宛てて神宮造営事業の実現促進に向けた意見書を提出。 6月、滋賀県告示より神社奉祀調査会規定を公示、神社奉祀調査会委員84名を委嘱。同会より「大津京の研究」を刊行。	
1935年（昭和10）	4月、内務省考証官の宮地直一が来県し、鎮座候補地の由緒等を調査。 5月、内務省技師の角南隆が来県し、鎮座候補地の実情調査。 6月10日、時の記念日に合わせ神社奉祀調査会第二小委員会を開催し天智天皇奉祀神社創立大体調査書を決定。近江神宮奉賛会規則が成立し、同会を県庁内に設置することを発表。 7月、角南隆の斡旋により建築技師小林福太郎が来県、神宮創建大体設計のための現地調査。 9月、小林福太郎より完成した神宮創建大体設計図面並びに建築模型が県に届けられる。	
1936年（昭和11）	3月、近江神宮奉賛会設立準備委員会設置。 6月10日、天智天皇聖業奉謝大祭執行、次いで天智天皇に関する講演会を実施。滋賀県知事二見直三より近江神宮創立計画をラジオ放送。 8月、角南隆指導による小林福太郎設計の近江神社社殿設計原図完成。	2月、二・二六事件発生。 3月、広田弘毅内閣発足。
1937年（昭和12）	7月、神社局長児玉九一より近江神宮創立について内定の報が届く。県定例参事会において近江神宮造営のために近江神宮奉賛会に県費十万円交付の原案可決。 8月、神社局長より滋賀県知事に正式に近江神宮創建・列格に関する件の依命通牒到着。 10月、近江神宮奉賛会を組織。会長は滋賀県知事平敏孝。	2月、広田内閣総辞職、林銑十郎内閣発足。 6月、林内閣総辞職、第1次近衛内閣発足。 7月、盧溝橋事件発生。
1938年（昭和13）	2月、衆議院本会議で近江神宮創建費のうち国庫補助金十二万円可決。 3月、造営予算貴族院通過、神社局角南隆、谷重雄両技師が来県し、現地にて本殿以下各建物の位置を本決定。小林福太郎逝去。 5月、近江神宮創立に関する内務省告示。近衛文麿を近江神宮奉賛会長に推薦。知事より県下各市町村長、学校長に対し「挙県一致して御造営に力めよ」との訓令を出す。 6月10日、近江神宮造営地鎮祭執行。以降、青年学校生徒、警察練習所員、青年団長、処女会長など整地作業に勤労奉仕。同年中に延べ約二万三千人が参加。 8月、崇福寺趾および南滋賀廃寺をはじめとする大津宮跡第二次発掘調査に着手（～1940年3月まで）。 10月21日、手斧始祭執行。	3月、ナチス・ドイツ、オーストリア併合。 4月、国家総動員法公布。
1939年（昭和14）	4月、奉賛会長近衛文麿の願い出により高松宮殿下の近江神宮奉賛会総裁就任が決定。 5月10日、立柱上棟祭執行。 5月、近江神宮奉賛会発足式挙行。崇福寺趾塔心礎より舍利容器発掘。 6月、近江神宮ほか外苑運動場設置のため第一次事業計画成立、国庫補助金を申請、翌7月公布の通達。 12月、表参道、柳川付替ほか外苑運動場起工式。	1月、第1次近衛内閣総辞職、平沼騏一郎内閣発足。 5月、ノモンハン事件勃発。 8月、平沼内閣総辞職、阿部信行内閣発足。 9月、ナチス・ドイツのポーランド侵攻により第二次世界大戦勃発。
1940年（昭和15）	2月、内院廻廊の立柱式齋行。 4月、平知事退任、近藤穰太郎新知事に就任。手水舎竣工。 6月、登廊竣工。 7月、透堀、渡廊、中門、翼廊、外拝殿、内院廻廊など竣工。 8月、神庫竣工。 9月、近江神宮外苑野球場、相撲場、庭球場竣工清祓式。神饌所、社務所、斎館、附属館、貴賓館、倉庫、鳥居竣工。 10月、近江神宮宮司に平田貫一着任、祢宜、主典ほかも着任し執務開始。 11月7日、御鎮座祭を齋行。翌8日には御鎮座奉祝祭を実施、奉納舞楽、蹴鞠その他催物あり。 11月10日、紀元2600年奉祝祭執行。	1月、阿部内閣総辞職、米内光正内閣発足。 7月、米内内閣総辞職、第2次近衛内閣発足。 10月、大政翼賛会発会。
1941年（昭和16）	1月10日、天智天皇祭（天智天皇の命日が太陽暦で672年1月10日に相当することから）。 6月10日、近江神宮における最初の漏刻祭執行。 7月、崇福寺出土舍利容器等9点、近江神宮に交付。 12月、神楽殿地鎮祭。	7月、第2次近衛内閣総辞職、第3次近衛内閣発足。 10月、第3次近衛内閣総辞職、東条英機内閣発足。 12月、日本軍の真珠湾攻撃およびマレー半島上陸により太平洋戦争勃発。
1942年（昭和17）	12月、神楽殿上棟祭、北神門地鎮祭。	4月、第21回衆議院議員総選挙（翼賛選挙）。 6月、ミッドウェー海戦。
1943年（昭和18）	1月、北神門上棟祭、楼門廻廊地鎮祭。 12月、楼門上棟祭。	2月、ガダルカナル島より日本軍撤退。 5月、アッツ島の日本軍守備隊玉砕。 9月、イタリアが連合国に降伏。
1944年（昭和19）	2月、参集所修祓。 4月神楽殿清祓、新殿祭竣功奉告祭。 6月、第一鳥居地鎮祭。 9月、崇福寺出土舍利容器等が旧国宝に指定。 10月、表参道第一鳥居竣功奉告祭。参籠舎地鎮祭。 11月5日、御造営竣功奉告祭並びに竣功式。 12月、参籠舎上棟祭。	7月、東条内閣総辞職、小磯國昭内閣発足。 6月、マリアナ沖海戦。 10月、レイテ沖海戦。 11月、サイパン島基地よりB-29が東京を初空襲。
1945年（昭和20）	1月25日、大化改新1300年祭執行。 8月15日、終戦大詔渙発。同奉告祭。 12月、占領軍により神道指令発令。	3月、沖縄戦の開始。 5月、ナチス・ドイツが連合国に降伏。 8月、広島、長崎への原子爆弾投下、15日に日本が連合国に降伏し、第二次世界大戦が終結。

参考文献：石川金蔵『近江神宮造営夜話』（1964年10月）、『別冊〈歴史研究〉神社シリーズ　近江神宮―天智天皇と大津京』（1991年4月　株式会社新人物往来社発行）、近江神社社務所編『近江神宮七十年小史』（2010年11月　近江神社社務所発行）ほか

第 175 回ミニ企画展

「近江神宮造営史～建築技師大洞藤三郎の設計図面から～」出品リスト

会期：2022 年 9 月 6 日（火）～ 10 月 30 日（日）

NO	名称	時代	形態	所蔵者
そうけん ぜんし 創建前史				
1	にっし 日誌	昭和 13 年（1938）～ 昭和 18 年（1943）	冊子	本館蔵
2	（参考）し が みやあと ひ 志賀宮趾碑	（現品）明治 30 年 （1898）	（現品）石造	（所在地） 大津市錦織
3	お ね つ じんぐう そうせつ せいがんしよ 大津神宮創設請願書	明治 42 年（1909）	冊子	滋賀県立公文書館
4	てん ち てんのう はうし じんじや そうりつ じこう だいたい ちようさしよ 天智天皇奉祀神社創立事項大体調査書 （幹事案）	昭和 10 年（1935）頃	冊子	滋賀県立公文書館
5	ぼう じんぐう けいかく ず 某神宮計画図（『小林福太郎氏遺作集』より）	昭和 10 年（1935）～ 昭和 11 年（1936）頃	書籍	本館蔵
おう み じんぐう ぞうえい だい いっ き こうじ 近江神宮造営（第一期工事）				
6	げはいでん ないいん かいるう ちようず や しんちく こうじ けいやく 外拝殿・内院廻廊・手水舎新築工事契約 関係書	昭和 14 年（1939）	冊子	近江神宮
7	かんべいたいしや おう み じんぐう しきちへいめん ず 官幣大社近江神宮敷地平面図（縮尺六百分之一）	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆 / 色鉛筆	本館蔵
8	かんべいたいしや おう み じんぐう けいかく はいら ず たてもものはいち 官幣大社近江神宮計画配置図（建物配置、 縮尺二千分之一）	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆 / 墨	本館蔵
9	おう み じんぐう ほんでん へいめん ず 近江神宮本殿平面図	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆	本館蔵
10	かんべい たいしや おう み じんぐう しやでん しんちく こうじ せつけい ず 官幣大社近江神宮社殿新築工事設計図 （本殿・渡廊・中門・登廊・拝殿、断面、縮 尺二十分之一）	昭和（20 世紀）	青図	近江神宮
11	おう み じんぐう ないはいでんしようめん ず 近江神宮内拝殿正面図	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆	本館蔵
12	かんべい たいしや おう み じんぐう げはいでん ならびに ないいん かいるう しんちく 官幣大社近江神宮外拝殿 并 内院廻廊新築 設計図（外拝殿正面詳細、縮尺二十分之一）	昭和（20 世紀）	青図	近江神宮
13	かんべい たいしや おう み じんぐう しんせんじよ しんちく せつけい ず へいめん 官幣大社近江神宮神饌所新築設計図（平面 及 天井伏、縮尺五拾分之一）	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆	本館蔵
14	かんべい たいしや おう み じんぐう ちようず や しんちく せつけい ず けたゆき 官幣大社近江神宮手水舎新築設計図（桁行 断面、縮尺二十分之一）	昭和（20 世紀）	青図	近江神宮
おう み じんぐう ぞうえい だい に き こうじ 近江神宮造営（第二期工事）				
15	かんべい たいしや おう み じんぐう きたしんもん ならびに すきべい しんちく せつけい 官幣大社近江神宮北神門 並 透塀新築設計 図（立面 及 断面、縮尺五十分之一）	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆	本館蔵
16	おう み じんぐう ろうもん かいるう せつけい ず しようめん 近江神宮楼門廻廊設計図（正面、縮尺五十 分之一）	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆	本館蔵
17	かんべい たいしや おう み じんぐう ろうもん かいるう しんちく せつけい ず 官幣大社近江神宮楼門廻廊新築設計図 （楼門桁行断面詳細、縮尺二十分之一）	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆	本館蔵
18	かんべい たいしや おう み じんぐう さんしんじゆうじよ かぐら でんひがし りつめん 官幣大社近江神宮参集所神楽殿新築設計図 （参集所神楽殿東 立面、縮尺五十分之一）	昭和（20 世紀）	トレーシングペー パー・鉛筆	本館蔵

NO	名称	時代	形態	所蔵者
おう み じんぐう ぞうえい こうじ ひ 近江神宮造営工事の日々				
19	にっし 日誌（昭和 15 年 6 月起）	昭和 15 年（1940）	冊子	本館蔵
20	にっし 日誌（昭和 15 年 1 月起）	昭和 15 年（1940）	冊子	本館蔵
21	にっし 日誌（昭和 16 年起）	昭和 16 年（1941）	冊子	本館蔵
22	ざっし『おう み じんぐう』 雑誌『近江神宮』 （1 巻 1 号、1 巻 2 号、2 巻 1 号）	昭和 14 年（1939）～ 昭和 15 年（1940）	書籍	本館蔵
23	かんべい たいしや おう み じんぐう ぞうえい しやしんじよう 官幣大社近江神宮造営写真帖	昭和 19 年（1944）	書籍	本館蔵

※展示内容は、予告なく変更する場合があります。

大洞藤三郎氏略歴

1905 年（明治 38）、岐阜県出身。早稲田工手学校（現：早稲田大学芸術学校）卒業後、小林福太郎氏（1882～1938）に師事。小林の設計事務所である小林建築設計事務所に勤務し腕を磨く。また同時期に内務省神社局嘱託技師も務める。1938 年（昭和 13）から始まった近江神宮の造営では、近江神宮奉賛会嘱託技師（のち主任技師）として現場の監督にあたる。この頃、南洋神社（現：パラオ共和国）、滋賀縣護國神社（彦根市）、御上神社（野洲市）、南宮大社（岐阜県）の造営、改修工事にも携わった。近江神宮の造営後は、霧島神宮（鹿児島県）の造営に主任技師として参加する予定であったが、終戦のため未着工に終わる。戦後は一般建築に従事したほか、滋賀県内を中心に社寺建築も行っている。1985 年（昭和 60）、79 歳で逝去。

滋賀県社寺建築資料（旧大洞藤三郎・田中宗次郎・赤塚吉郎資料）の概要

大洞氏が保管していた資料のほか、大洞氏の義父で、日光東照宮の修復や伊勢神宮の式年造替、明治神宮造営などに従事した田中宗次郎氏（本名：惣次郎）、近江神宮造営で棟梁を務めた赤塚吉郎氏の 3 名にかかわる資料。滋賀県内の社寺建築に関する図面が中心で、分量の面では近江神宮分が一番多く、滋賀縣護國神社がこれに次ぐ。滋賀県外では霧島神宮、南宮大社、足利織姫神社（栃木県）などがある。このほか近江神宮造営期間中の工事日誌などの資料も含まれる。

資料内訳

- ・近江神宮図面 406 点

・御上神社図面 28 点

・鞍掛神社図面 14 点

・足利織姫神社図面 16 点

・小日向神社図面 4 点

・四之宮天孫神社図面 8 点

・新宮神社図面 8 点

・蔵光寺鐘樓図面 4 点

・小倉山観樂寺不動堂図面 4 点

・円満院図面 4 点

・某楼門図面 3 点

・その他図面類（青写真含む） 127 点
- ・滋賀縣護國神社図面 109 点

・南宮神社図面 10 点

・田中神社図面 7 点

・坂田宮岡神社図面 8 点

・石坐神社図面 16 点

・滋賀里八幡神社図面 6 点

・善正寺書院図面 5 点

・宗忠神社図面 2 点

・桂尾山勝福寺図面 7 点

・園城寺大門図面 11 点

・その他冊子・書籍類 60 点
- ・霧島神宮図面 15 点

・日吉神社図面 13 点

・白山神社図面 5 点

・朽木瓊瓊杵神社図面 5 点

・瑞雲寺図面 9 点

・妙光寺毘沙門堂図面 3 点

・南小松八幡神社 12 点

・若宮神社図面 4 点

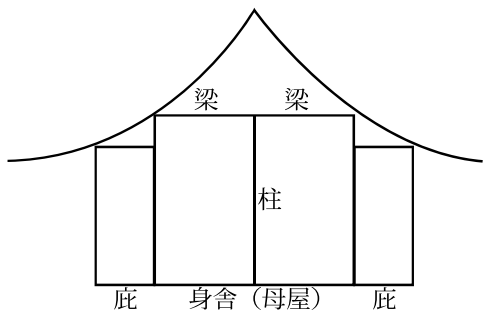
・鞭寄神社祝詞殿図面 4 点

・円鏡寺楼門図面 18 点

建築関係用語解説シート

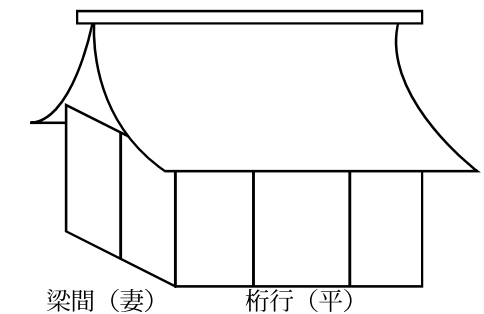
◆社寺建築を構成する要素

日本の社寺建築は、柱・梁・桁という三種類の部材からなり、この骨組みの上に屋根をかける。建物の手前側と奥側に一对の柱を立て、その柱どうしを繋ぐ部材を梁という。これを基本単位として、横方向にいくつか並べたとき、それぞれを繋ぐ部材を桁といい、建物の骨組みができる。この部分を身舎（母屋とも書く）といい、建物の最も主要な部分となる。建物の奥行きを増やそうとした場合、身舎の前後に柱を立てる。この身舎に付加された部分を庇（ひさし）といい、社寺建築は基本的に身舎と庇で構成される。



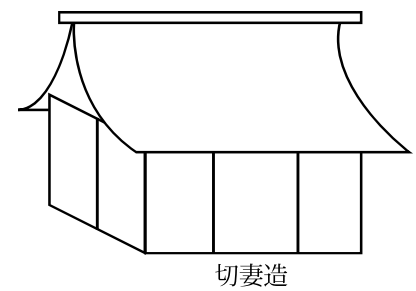
◆社寺建築の規模の表記

社寺建築の規模を表記する場合、正面の柱間（柱と柱の間）の数で表す。神社建築の場合、柱間が一つのものを一間社、二つのものを二間社、以下三間社、四間社などと表記する。また桁側の規模を桁行（けたゆき）といい、梁側の規模を梁間（はりま）・梁行（はりゆき）という。なお、一間を六尺（1.82 m）とするのは、東京地方の慣行に基づいて明治時代に定められたもので、寺社建築の場合は柱間の大きさが一定しない場合が多い。



◆妻と平

日本の社寺建築においては、建物の正面の向きにより平入と妻入に分類される。桁がかかる側を平といい、梁がかかる側を妻という。平側を正面とするものを平入といい、妻側が正面になるものを妻入という。



◆屋根の形状

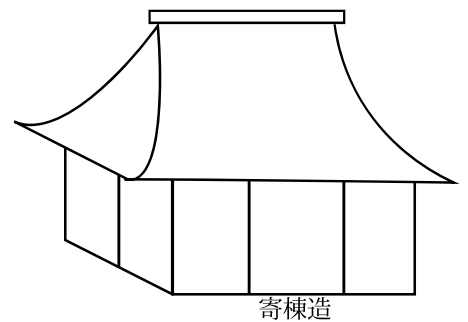
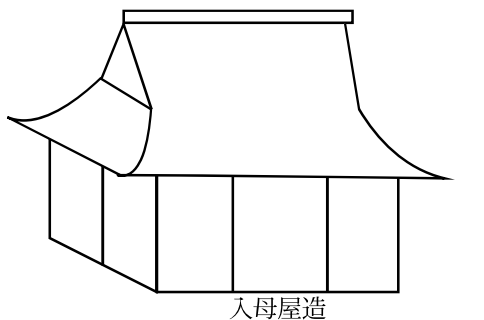
日本の寺社建築における屋根の形状は、おおよそ4つに分類することができる。

きりつまづくり ・切妻造

垂直に両端を切り落としたような形の屋根。もっとも簡単な形式だが、神社建築においては広く用いられる。

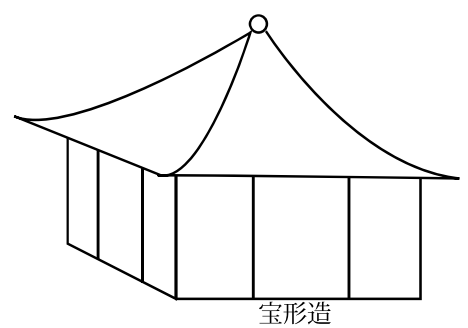
いりもやづくり ・入母屋造

切妻造の両端側の下方にも傾斜した屋根面を設けた形式で、妻壁（つまかべ）という三角形の壁ができる。もともとは寺院建築に用いられるが、平安時代以降は神社本殿にも使われるようになる。



よせむねづくり ・寄棟造

四方向に傾斜した屋根をもつ形式。棟（むね）（屋根の稜線を形成する部分。この部分にかける木を棟木（むなぎ）という。）が四隅から寄せられ、中央の棟につながることからこう呼ばれる。寺院建築においては金堂などの格式の高い建物に使用されるが、神社建築には基本的に用いない。



ほうぎょうづくり ・宝形造

基本的に桁行と梁間の柱間が同じ正方形の平面で、中央の一点に棟を寄せた形式。こちらも寺院建築のもので、常行堂（じょうぎょうどう）などに使用されるが、神社建築には用いない。

◆神社本殿の形式

神社本殿には、基本的な形式として次の4形式がある。

しんめいづくり ・神明造

切妻造、平入の建物で、庇はなく身舎のみからなる。高床式の建物で、柱はすべて掘立柱（ほったてばしら）（柱の根本を土に埋めたもの）とし、棟木を直接支える棟持柱（むなもちばしら）があるのが外見上の特徴。伊勢神宮正殿に用いられ、近代以降は特に伊勢神宮や天照大神をまつるための形式として特別視された。

たいしゃづくり ・大社造

切妻造、妻入の建物で、身舎のみからなる。高床式の建物で、棟持柱を備える。名前の通り出雲大社本殿に用いられる形式で、現在は柱を礎石建てとするが、本来は掘立柱形式だった。神明造および大社造は神社建築のなかでも特に古い形式で、その起源は飛鳥時代に遡るとされる。

ながむづくり ・流造

切妻造、平入の建物で、身舎の正面側に庇を設ける。正面側の屋根と庇が一体化して、長く流れるように見えることから、流造と呼ぶ。全国で広く用いられ、重要文化財指定される神社本殿の半分以上がこの流造となる。近代以降は、明治神宮本殿に用いられるなど、多くの近代創建神社で作られた。

かすがづくり ・春日造

切妻造、妻入で、身舎の正面に庇を付ける。奈良県の春日大社本殿が代表例で、全国に分布し数の上では流造に次ぐ。基本的に一間社が多く、流造などに比べ小型の社殿となる。

このほか、すみよしづくり（住吉造）、はちまんづくり（八幡造）、ひよしづくり（日吉造）、りょうながれづくり（両流造）など、地域や時代ごとに多種多様な形式が認められる。

参考文献：山田岳晴『神をまつる神社建築—玉殿の起源と発展—』（2018年、株式会社弘文堂発行）、三浦正幸『神社の本殿 建築にみる神の空間』（2013年、株式会社吉川弘文館）など